



『沖縄県統計書』にみる西原

一八八三年(明治十六)、沖縄県から『沖縄県統計書』が発刊されました。同書には、土地・産業・農業・畜産・政治・教育・警察・衛生といった多岐^{たき}にわたる内容が収録されており、発刊当初から一九四〇年(昭和十五)までの五十七年にわたり編集が行われました。今回の「町史だより」では、『沖縄県統計書』の中から、西原の農業についてみていきたいと思えます。

一九一五年(大正四)の『沖縄県統計書』から、作付面積^{つくつけめんせき}一反あたりのさとうきびの生産高をみていくと、沖縄県が約六、六〇〇斤、中頭郡が約七、四〇〇斤に対し、西原は約一万八〇〇斤と記されており、約二倍もの生産をほこっているのが分かります。私たちが住む西原は、言わずと知れたさとうきびの産地ですが、その姿が同統計書からも伺い知ることができます。そ

の背景には、一九〇八年(明治四十一)に沖縄県糖業改良事務局の工場が我謝^{じゅんせう}に竣工^{しゅんこう}したことや、一九一二年(明治四十五)の同事務局の廃止に伴った、沖縄製糖株式会社、沖縄県立糖業試験場の設立が関係しています。また、西原の肥沃^{ひよく}な土地がさとうきびに適^あしていたとも言われています。さとうきびの生産が最盛期をみせた一方、西原における甘藷^{かんしょ}(サツマイモ)の作付面積が一九〇六年(明治三十九)の一、一五七町を境に、翌年には九九〇町と次第に減少している傾向も同統計書から読み取ることができます。

『沖縄県統計書』をみていくと、近代西原の姿がみえてきます。

- ※一斤…約600グラム
- ※一町…約109メートル
- ※一反…約10アール



サーターグルマ
(『沖縄縣人物風景寫真帖』より転載)